

# 健康と食品

寄稿

名古屋大学大学院 生命農学研究科

草地理学研究分野 教授 横田 浩臣

日本人の平均寿命が八〇歳を越えた今、平均寿命の他に健康余命という尺度も利用されている。平均寿命が長くなった原因は、戦争による死亡がなくなったこと、医療が発達して国民がそれを享受できるようになったことが大きい。また、食糧自給率は四〇%程度ではあるが、経済的に豊かな国になったので、世界各国からわれわれの食糧は調達される。現在のところ、まずは

これらの食品は安全なものとして流通していたので、消費者が防げるものではない。二一世紀は食糧、健康、環境の時代である。これまでの時代と比較して、多くの情報がわれわれには提供されている。「自分の健康は自分で守る」という考えを持つことが重要であり、また情報を的確に判断することも重要であろう。



家畜生産の原点は、その動物を生産する地域での農業活動から生産される有機物資源のうち人間が利用できない部分を飼料とするものであると、私は考えている。このように考えると、

「狂牛病」が日本で発生した。ヒツジに発生した病原体が、その層の一部を牛の飼料として用いたために、牛に発症したのである。われわれ日本人には牛からの感染が心配されている。

われわれの日常的な食品から健康を害する事件は多い。加工乳事件、植物油や人工粉乳への毒物混入事件、有機水銀やカドミウム汚染食品事件。これらの事件は食品への異物混入が原因である。今回の狂牛病事件は食品そのものが原因となっている。

肉骨粉は飼料に利用することになる。これまでの家畜生産は生産効率を向上させることに力を注いだ。そのために、例えば大量のエネルギーを牛に摂取させるように動物性油脂を飼料に混ぜ、蛋白質を与えるために肉骨粉を飼料に混ぜた。日本では飼料の多くを海外に依存し、蛋白質を必要とする時には魚粉や大豆を利用してきた。英国を中心とする欧州では大豆を利用することが少ない。こんな背景があつて肉骨粉

に対する需要も西欧では多く、海綿体脳症も拡大したのではないかと想像する。飼料の多くを海外に依存しているわれわれには、飼料の安全性の確認は信用以外にはない。

野菜に関しては、有機野菜や減農薬野菜が流通している。畜産製品にも同じような品質表示は出来ないのだろうか。今のところ、それを売り物にしているものはあまり見あたらない。家畜生産物の場合には生産向上に用いられる薬や治療剤等は、人間へ移行しないように出荷から逆算して一定期間の使用が禁止されている。牛は本来は草のみで飼育可能である。日本では多くの牛が農耕用に飼育されていたが、耕耘機の導入とともに姿を消し、肉牛に転用された。農耕用の牛は体重の急速な増加や年一回の出産は期待されていなかったため、稲わらと野草と米ぬか程度の飼料で飼育されていた。牛肉にさらなる安全性を追求するならば、本来の草食動物生産の原点に戻らなければならぬ。放牧を中心に草資源で育成し、肥育の後半には安全が確認された植物由来の飼料で飼育する。こうすると生産効率は落ち、肉質もそれほど上等なものは期待できず、生産コストは上昇する。その代わり、肉の安全性は格段に増す。こんな牛肉を生産したら消費者は購入するだろうか。健康は各自がそれぞれの手段を講じて手に入れるものである。

E-mail: y941210m@nuagr1.agr.nagoya-u.ac.jp